

「紺屋の守り本尊 愛染明王」

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

平成二十八年、宇都宮市の文化財として額装の愛染明王図が指定された。これを

受けて栃木県立博物館では、二十九年新年早々開催された「宇都宮ゆかりの画人」展の中で、この愛染明王図を展示し好評を博した。

愛染明王図は、市内三番町に住む、元染色業を営んでいた家所蔵するものである。創業は文化年間（八〇四～一七）で、天保年間（一八三〇～四四）に現在地に移り住んだとされる。創業の頃の染色業は、タデ藍を発酵させて作る藍玉を原料とする技法が主流であり、染色はもっぱら紺

色であったことから染色業者は「紺屋」と呼ばれた。

宇都宮市では江戸時代から明治期にかけて、地元で織られた木綿地を染める染色業が盛んとなった。この地元産の木綿地を宮機みやはたといい、それを藍で染めたものを「宮染みやぞめ」という。明治期、宮機と宮染は、宇都宮市を代表する地場産業であった。染色には流水を必要としたことから田川や釜川沿いには、宮染を行う業者が立ち並び、明治三十七年には四十軒を数えたという。ところが宮機の衰退とともに宮染も衰退し、業者そのものの減少はもとより、天然藍に代

わつて取扱いが容易な化学染料を用いた注染による中形加工ちがひた（浴衣地）・手拭地・雑染めなどに変わった。この愛染明王図を所蔵する家は、昭和五〇年代まで染色業を営んだといい、こうした宮染の歴史の変遷をたどった家である。

ところで伝統的な手仕事に従事する職人の間では、守り本尊として特定の神仏を信仰する風習がある。大工や左官などは、聖徳太子を信仰する。聖徳太子が法隆寺建築の際に、大工や左官などを尊重したからという。漆塗職人は、虚空蔵菩薩を信仰するが、漆塗りにおけるコクソこくそという技法が虚空蔵と音が似ているからという。一方染色業者は、愛染明王を信仰する。愛染明王は密教の仏であるが、愛染と藍染が同音になることから、藍染業者は愛染明王を守り本尊としたのである。愛染明王図の所蔵家では「正七二十六」と称し、旧暦の一月と七月の二十六日に愛染明王の

祭りが行われた。愛染明王図はもともと掛け軸である。これを仕事場に設置した神棚に下げ、特別な膳に盛った供物を供え商売繁盛を祈ったという。

さて、この愛染明王図であるが、作者は狩野梅春貞信（？）安政五年（一八五八）で、制作年は嘉永元（一八四八）年である。作者の狩野梅春貞信は、宇都宮の池上町出身で、梅溪鈴木賢直ともいい、のち表絵師の深川水場狩野家を継ぎ、嘉永年間の日光東照宮修繕に携わったとされる。おもな作品に「釈迦三尊十六羅漢図」（桂林寺、県指定）や「釈迦如来像」（延命院市指定）、「白衣観音像」（真岡市・芳全寺）等がある。愛染明王図は、細密かつ本格的な仏画作例であり、梅春貞信の仏絵師としての優れた力量を示す数少ない作例として貴重であるということから宇都宮市の文化財に指定された。

一般に紺屋では正月二日の仕事初めに、愛染明王の祭りを行うが、この時、仕事場の神棚には半紙を藍麩あまごに浸しただけのを飾る。これほど立派な掛け軸を飾る家は聞かない。



愛染明王図

（宇都宮市教育委員会提供）